ニューヨークタイムス ２００２年１２月２７日（金曜日）芸術論評

ヒロユキ　ドイ　フィリス　カインド　ギャラリー 136グリーンストリート、ソーホー

２００３年1月４日まで

ヒロユキ　ドイは、独学で学んだ日本人の芸術家で、インクで描いた線画の個展を開催することで、60代になって始めて美術界に登場した。表現している言葉はたったひとつ、サークル、丸。大きさは常に変化し、陽子や電子のような非常に小さい丸から、何チ個が集団となって群をなす。形作る輪郭や、地勢、内部から出てくる光りには、非常に大きな変化がみられる。ドイの作品は、漂流する星雲のようでもあり、渦巻く銀河のようでもあるが、また荒々しい石にも似ている。繊細で、催眠術にでもかけられたかのように魅惑的で、異常なほどに美しい。完全に異常なほどでないにしても、創造していくことが取りつかれる作品に影響を与えている。作家のサインがなければもっと美しかったことだろう。サインはサッカリンの甘さを加えているだけだから。ロベルタ　スミス